百人一首
下
八達13
2.008
3止

門へ13
2008
巻3

東京大学図書

さんげ物語

みつけ度乃事

さてゆくゆく丸尾山へ行ゆくゝ大蛇大
蛇とおもうて逃ゆくゝみるくゝひ逃てゝ
あるゝ丸尾山へ入れたるはまれゝ見ゆく
し龍授国乃住人みつけ度のおのれゝ
ゝゝ入りて行ゝゝ三池度へ出れゝ行ゝそ
都へゝゝ行ひつゝたそのゝ勝けゝ者
文のゝゝもゝゝゝれゝ小れゝゝゝ
ハあゝ恐ゝ海りてゝ行くゝりのゝ宮ゝ渡
渡とゝれゝゝゝゝ出ゝゝゝゝゝ
ゝゝけきゝゝ物ゝゝれゝ国市

行ひてまゐりてまゐりてまゐり

なをうらに成ぬ　ふるけく　いにしへ　ゆ
ふ　ぬ　ぬ　ぬ

[illegible]

[illegible]

[illegible]

いみぢくひりあるものとなりけるものとなりあれば
ゆきこかあるべからずとなりよりてやうやうこと
きまり定まりぬれば
ぬくべきものの行ひ申さるべきのし新旬の酒の
まとのことなりて行くはたらかんまことに
しけるなるべくなりぬれば
なりまはあるべし婚姻とつかう國とかうなるも
みな紙賣をとりつくらんとて作らしめ
仕使をかうにまきへくなれるものなり
しかせ酒をかうむりて酒世屋にてふ
くしゆをまのへり初めはをしかたを
きにたちまちたつるへしりうつくしかもし

あるべきかはあれはまはしたるにしたがへ
なりなんこの張の人をとりてとりつくし
まひくうれくなりて酒世界にてふ
ゆくのくれくなりたるかくて貧人ゆうて
よくくはなんとをこのけるなんくくこと
とうなくくうやうやうしかるに
つくそもくせん母をくくなりたるへ
ものの書中にはくはなるものなりの
なやくくのはくくるものとといひ行ものの
酒り一家は家をくくりかくくるの
あはいにをくくく

作りまし室に入りし家を見つくし給へ
共をのこりなくあつまりきんこうの
ごとくちりぢりに成おくして逃出し作りもの下
らんにあらず海にさへ先をられ引あげさけさ
くあるしあるりめられあんあく家とあり
ちり洗河ハ行しし作るべきまりもの見る
源くりつたふ三てくとちかくいをちかあ
たくさ絵のをいつくとてそこくに作
やと海人うをたなし命の源あんるうしを
うみなれとらひつけくなくざわり
壹まてあふりを釈ハ壹り逃後とて
ひが作まとつくしらひなけをはりり

ぜんの事種りを作のかの明りかの作
りハ男代なるひとをて我してをあり作り多を
作れをちをあハまくくあるて作れいるり
を一めををみハをくくを見て作るへ成ちる
きをるのりるるをあをを見をらをとくまし
あのまりをををるへ成をて作をハをりある
今一をひををりをあのををくくし又より見を
をひ成りくくかり藤あをとあるりて作多
ハ成をりを作へ又古郷へををくさ多あ釈ハ
見をりをのをのくくして海ををく作
作らくを身を如へしりりくをあく源
作のくくををくををいをけはいを海をりく

[illegible]

[illegible]

[illegible]

あまりに世ていたに同じ道をあゆみたくさんとそ
ひろきとり付きひとくたるまてはかり
二人のおやかたにみ沖多てい
られあし何へ如へこ方ものとをとり
ものまひ紋付をへてこたるのよう
つちうひて作りしふやかとう大
毎日ようをうるあをひしてこ
りふこまひ拡と見てそ川の中浦人
あををせうひこりしてあをひろ出人
あまこをひうあまをとてつをは行ものて
しまへとのうへて旅人のうこれをうて
をけ作こし巻角こうてこうえ人

[illegible]

[illegible]

[illegible]

行ちに此の世をこの御に為つまてしるく
為へしり行りしに又越後の西へとうとうて少
行きに八一めをちゝぬ越後ばらを見うり海をせく
まうひく遥をうれうあり山をめぐりしのり
あひ者んすのうまてうれしつくも
ちつくちるくたりうしひりのく情るも夜
れ四ふうりうひく一夜の宿のうれつも
ちうちうくうの四姿屋代作まて作まに宿をちうき
て越前一ふ者くうみをひさつくうう
よ宿りうう海わひてちうう蔵り
ちううの宝ひてを作りく姫りれ
くれうの神に分て為ちうみうら

ちのまれをせて八度中をひく和くの為
ひのうなく八さうそうくうひをあ我
八くれて（ちりあの蔵をもをうくうの
れ何をもをれうれくれのほひ
八をて八度の心もひうりなし見をを綱代の為
をて神りう前一第をを八度又を初うき
うを四八ををよりく。をてりつ祝ちをの
ひをてをを的のつまりくをうををを
ひひをくを長井のあを海けをうこの頼
四をの湖ををりのくうれる姫の為代
をてとうのくも八為をを移くうの越後
乃ちくを者の湖をの為八をてををあを

藤なみ八は男と結ぶふるさとやそ道さへるうれし宮へ八ゐうそうのうれあるこゝ川瀬の霧はむ
うけ二ゐやたにあり世八作りかけごとあ
ゐひかうる芭作のうみうれさつりしあ
みへううきうの水の草のうまつ
うゐ望つて藤の霧のしさ紙乃あれた
あれれうけきしうふしされの雲むうひ
うそいうひつまうしあうしあ露
の情とうんそやひうへうれううれて
きうゐつされうの雲のうてもはれうれ海
ちうり書ううみし海うみたうり
れ送りし文字ゐうて雲うりうに雲あや

[illegible]ん見とゝ[illegible]八我身をも用ゐ
[illegible]の業に拙しつゝまつぢいとゝ
[illegible]くざわ堂へ[illegible]つゝて燈を
[illegible]作りしへとて[illegible]の役乃男一門[illegible]より
しめ藤[illegible]母[illegible]
と宮ひ[illegible]れ八[illegible]大[illegible]ふ[illegible]て[illegible]
の[illegible]八[illegible]男一門[illegible]代の[illegible]
[illegible]し[illegible]
[illegible]母[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

[illegible]ぢ[illegible]宮ひ[illegible]れ八[illegible]
[illegible]作[illegible]け[illegible]八母[illegible]
[illegible]を[illegible]八[illegible]
二[illegible]
[illegible]
[illegible]

渋湯をわかし功徳をほどこしのぼるあふぐ諸
人ゆかり渋河帝ゆかり比丘尼作られるハ是ハ生新
れ世業うせまゝ法花経の御ゆかり爾とうり
くゝるゝ比丘尼ハ法華を学ぶ者と作る
て女人の比丘尼一回りけるゝ人ゝそうろう

花山院姫君れ事

みるくさんけ猶流と今阿弥陀仏　くべうま
宮くゝ祈のびゝ身をとゝそくゝとゝれかうり是
張乃人ゝ宮のひさそくゝぶりやうりのみ
しゝ出ゝれにあるゝれあるゝとゝれるハるゝう
れるゝゝれさんげうまゝの猶流三十一宮殿

流れ祈をひて秋の頃れもれとゝひて祈をそ
流のゝうて渋流祈ゝうとあのれ作るれ宮人
ゝうて下まるうんといひみゝくゝくゝ月のあゝと
れ不思議さよゝゝゝ未石れあるゝきんな
て作ハ仏尼ハ尼ハとゝ引ゝゝるゝへゝさんなれ今
ゝう探ゝうゝまゝゝ一あごんりいゝくゝり
人ゝと西ゝけまれ西人ゝを貫ハ流ゝ者ゝ西人
にあるゝ祈ゝゝ流ゝのゝとゝれるゝへきに
作ハ仏ゝ作ゝれるゝ流ゝうんゝ
祈かゝう

ゝゝゝ

とかうあらくはたらきなれば
海辺なる漁うりの屋にて
とひはたらきあさつゆ海
いまさしてやうにまぢかふ
鯖文ぞうに一はいうんとひ
とのうつりて行きて魚人
不二ぎやうにて一ぱい
行かんしくしくはとも耳まふま
きまを行くあ
ドつくれうにあごんとはかう
や見と佛ハゆひせ
行くれ藤沢にうぞれ

とひすておうれハ又の比江尾こうや
ひくくなるとれ鯨文とくまくハ三十一字を
はくこうまくそれあおいふんく結まれ
みるくれさんけと鯨ごくくはあうこと
ないちうのことはうくくれうまくはうくくて
鯨のうくハひふくくとどめ作ドくにこんはふ
くくと弁ひあひんくくれ取りすくれうれ和歌
ハさあうう鯨のまて作る見浦ハ海門りあうれ
ハいまぐさぐくのくの人まて作ドくくのれくく
法ちくはひうのハ和歌あんつくまくくや
さんけとせされハ雅あうくくのまく皆と南拍
詰まて作るかくくさんぐろれさんけをハ去作ね

きやとゝりそれハ北そくよの尼ゝそれ〻尼ゝさん
けハおもつく〻ゆりてさんけ表奥のさんけとそ二
つこつ作りてこそ北丘尼こゝろくとゝろ
それそ又と阿弥陀ぶゝけるハ西そこそさんけ
よ二つ三つハ方角〻〻さんの多り佛ハ多〻沢
佛ハさんけよ彩〻そこそ大よ
て二つ沢二つよハ老のさんけ二つよハ老れさんけ
そのくゝこゝひれさんけハあくくゝ丘
家代薬師こゝろのこゝ
て作りそのさんけとゝハふぐんさんぐこに
沢多りあつくゝさんげゝやたんさゝ
さゝ市ぐいあよ内〻〻〻〻〻〻

とゝりくれてくゝ善事をしんけんしてげんなび
ぢつをんいろたうんの一切の罪をうくゝと消セ
ばうるす霜露の如朝日にあつまるがごとくみな消ル
やうにゆへ一切の罪のおこる根本の
源をうるひるよりこの一切の神ゝさ
とうるうちに光るなどう妙恒のもと有る人
きやとゝれうるの時ふの尾さて此人ハ唯人
をゝ心の聖りの如ものうんかるす
とゝうるうとゝそゝれうハさんけうとハ
罪をくゆうこゝろゝ行うへ一紙也ものの
さんけうのさんけゝ二つれ出ゝれうる
ゝゝいの行うそやうそのれまうて行うるの

のうにいるもがられ行うるれ行うるれ行うるの中行うる
をゝうゝきうゝハなゝゝうゝやさいをゝ
うゝハ宝うゝこちゝ天台芸言禅律等れ教義
りあひ宗りゝ時ゝうゝ行うれハものゝ人
れ行うゝゝ宝うゝうゝれふ法うゝ又
あう道者りとひ行りれハこのゝうの云
こそむうゝきまりなんそちやいひもゝく
行うれハものうれのあをりうゝくゝようう
行うりゝくゝハをうゝれ央の性あうゝゝを
うゝうゝうんハさゝに志うれゝんめ也九日の光
向ひかくゝるの行うる河さて八法王りちんの央の
性のあうる経るゝゝとうゝうゝりゝ

もみくしゃ　火の性のあらはれたるハまんぞく
ものこしにたゝんかなしに火をうつしわらハ
じくもめくもしたゝてよ火をとゝのゆ也
あるいハ火性ハかゝるものゝ
かゝるにさゝるもたゝるこ
ゝるもんかゝるのあるこ
やどゝこしにあんかゝるこ
火をうしゝ也そゝかうう
ものゝ四あるゝゝゝ
いゝんのあ人ゝ
ゝゝゝ性煙のゝゝ
ゝあ、ゝんのゝくゝ

ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

せいこうりゅうはらうこうひ一夜れうり銭と
ゑつ一ぱいつゝ人のはんぶん中宮めゝ常住と
ゆげをすみゝりゝ行りとかんやしんめりい
つまる法界り常住の所あんちゝん常住と
宮人まり城りゝんよゝて行まゝ三界とハ銭
界ハ六ゝ天ゝ天ゝゝ十八天主色界りゝ
ゝようゝのゝ行ハ三界ハちゝゝ六ハ宮ゝゝ初ゝゝ
天ゝゝりゝゝ法天の食ハあゝゝゝ八方ゝゝも
法八美果ゝ人りゝゝ八ゝんゝ三げゝやて
ゝんゝゝ法ゝ三ゝゝよりゝゝ十一四ゝんゝ
ゝゝ行ゝゝ酒して法世界ハ六十年と一劫ゝせり
六十ゝとゆびとゝりゝとゝゝゝまハりゝた七百二

十月八日とゝんゝゝまハ三ゝ六千余日ゝて行ゝ見
ゝゝゝ

海さうの山の身のくるみ法ちゃうれりゆたすれ
法ゑへりくこそがんをくがこの道ちくのけひ
ゆきこそかもしきこうんとにこうこうこれをく
あつまたうれめとと自ら憲言衰傷とうくいいは
くうれを乃為栗牧帳こうこうて出かんをを
ゆうこうこ量に捉ちくこは海こうを煩悩
則量に提こうこうこや之こう傷れこうこと
こうこうこうこうこれれこ今阿ふこけうこと
ちうこうこき牧帳刈量花のはこうけ法ちう畑
うをこうこうこうこうかんをふこくかこいこうこ
ちうこれ牧帳こ量に花ととこうこを法を牧
ちうこくまて一ぢうれめここいを法ちかんをく

きくちうこうこは地たこんとうこくこ仕こ海こうこれ
水とこうここれをまこうこ射てでんこうこうこ
て作りこうこをこうこうく牧帳刈量花といふこくれ宝
れこうこはあれこあれ作をみなくれこくあこはかん
をうと之こうこてこうこそのこうこかこのようひく
こ作こくこの海こうこん寿つくこれ氷とこうこ作こう春
れ湯新こうこひとこうこ晴氷とこうこたこうこ決
ちうここは則の字こうこうこ作こうあ地こは義よはかて遊廛
れ弟ふこうこ三人こくこかこれこれかこうぢ海こ
殺こてあこうこうこうこ牧帳とぢんこて量授
こうこうこ仰の回ふれひを作こうこ作よはこいこう
回海ここは刈こんあふこれこは則かここここ所の

四我国をわたくしの弟三よりたくいたくしの歌拙

なを業の拙しいうの品わるいとわるうと

そうくのくくこの三人のもくかうひあくづいの三

とうやくくとのくくのうの後ぐんざいまうぐれよ

さくくじがうくろひのぐんざいまうぐれ五七わる

ぬのよりやいろおつくんやをいりくんやわる

れいのいくとハおりのさくかれくものんくさがう

をうくくに土くいのうくくいのうくくあくくて

四んくて歌恨の業の拙乃わくくるの作まくい

まくくるれ話のあくくのくくのうくくとりて作る

くくけをハのくくとくくと作くも

同おくくの耳おくくとくくと雑作くる

芦の葉に風うちそよめく
月のかげ
四方の草木にてもあらはれたり
と一心の念仏は一心の人あり〻仏とゐて西
方をおがみたてまつる六字の念仏にて
ゐるのかたりもしたりもしたりもしたりもしたり
ようけく光を入れ給ひ月のかたり
かりをいたしてはぐくみたまふ月のかたり
し月をたし一花をたし一花をたし一人
をたしてゐるとけうろうあくとされたるこれ
夢里の閑をとゝのへりせひをされたるあるとい
をぎろくなかりちんとはわるとれたまふ

あるとまたかり心せとれ人をとりそひまりせ
ぐしき家りの家りのかたりんたりはたりたり
このうる生こうしき繋りとりを人ひぐ
をてく
ふりて紙をゆるうれ雲乃
うの時りの西のうる身に出る
や絵ぐいを西よりて人をとりれいりをと
西ぐいりうをれいは人をとり付はをとあふいを
夏人の帝紙をとりて紙に六月を西ぐう
をあるをを居をとりぐ魂を西ぐまぐう
れをくをを一身やをくはわりをを
出りをの

人々おもりれうきまれそのら或人うつくしと
きのへるいろかゝ空の
山れ隠の雲ゆきて、ちつけるうゝうぐんへ揚
所ひくこうに天子へよろ給つへきに四度まり
有られ石れ此君こそ十六の春のころ
四度れ四番花山院へ参るひく花をゝ見
ゝけるに花ゝ香ゝて一年ゝ咲ころ
一人ゝ公ゝ一ゝ四ゝ月ゝ八花れ
ゝ春京にゝくゝ行ゝ蔵
花のちるに夕風ゝ吹ゝ手紙庭のおもら
ゝ月ゝ雪ゝ降ゝれいゝゝとゝ
ゝ行ゝ四ゝ月ゝ八ゝ花ゝ山院の南へ

[illegible]

[illegible]

[illegible]

おのひけるめれとゐ女房ゆゑ思ふ人をとられ
と聞よりはつかへきまゝにて行ものもなくなる
有の女ゝ世記あ君をはゝくゝしきものゝ男よかゝり
ゝゝハ行ものめつゝゝゝゝまゝゝゝにもたり
はゝなりゝよみしはゝ常忍れ人よりはゝとみて
他同一女ゝ身なれ中ゝゝゝれ義ゝ井
ものまゝくゝとゝゝまゝにまれものゝ井ゝゝゝ
はゝゝ男ゝ一ものゝゝゝゝゝれゝゝ
ゝとゝゝれゝゝゝふゝゝゝひ懸ものゝはゝゝゝ
見れゝゝゝゝゝゝ人ゝまゝゝてゝまゝれ
男ゝきまゝに男と井ゝて人ゝれゝゝ
男とゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

世義世立ゝて行ゝ侍ハ霧の命と清のゝゝゝゝ一海
ゝ一ゝひゝゝゝゝゝ業ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝ人ゝゝ人付ゝゝれハゝゝひゝゝんゝ伊のたゝ
男ゝ貴人ゝゝて小夜文ゝゝゝめゝゝゝゝびゝけゝハ世
姫義ゝゝゝにゝゝひゝ人ゝゝれけゝまゝゝゝゝハゝゝ
世ゝゝて人ゝゝ海ゝゝゝ侍の世ハ命ゝゝれ庭
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ命
男ゝゝとあゝゝ世行ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝ男ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

あるこの海辺にて
なんとかなれたしかるこ今はとひとあるべきつるも
なりとおもふにけりごとをちかひけ姫君とうれ
しくとりひろうちかたよりおぼしら人おぼし
ちかひ接葉外よ二人なるひけりとちぎと
ひきはなす紅見つくしてそれ和よ出まりしハ江戸
ハ出まるれハまうひおこうちなるもうち出
あるとふしてこもせてあるさハ面ちうりの世
まり腰とつぐれつきめ生んとせ所こにふ
ひめ元ハのらぐいなどまり給つるそこちうり
夢とこうれるひうれ男何といつたたしく
まし急いのやとて京うこう寄して湊に底あう六

つあけるさて此男しきりに涙をながしてなげきけ
れば是八二人こゝにいるとあるをもてなしておりやとて
まいりたるとんとせ所ひあるべきもの此りに
をきろ筆とるべきものとうるをとりて此
ろ行のやうなる人を見まいりのことをひとり西を情
あるべきものやとて尋ねしを一人あるべきみる
あるべきに此はてしてそれはわざとそれはわれ米のこゝにやて
こゝに此力をそれは此男をてなくなる人きあるを
つあるべきそれ力をとゝびいりしらまさおりも
てでとけるにこゝろやあるべ人のこゝにそれはを
はあやまりひるべふもさこせこゝみよ行べあ西にはり
もそひ家も此男ゆ人ふべく如り家の命濁べし

此にてそこに此時の世とゝびてこひる人推ある人れ
ものゝあまに是此男を尋さあれ山にはこ
ある比丘尼行べそれ人をのべ大ひまう
と添べそこうゝひとなくいひとなくとこ
聞りまにひあ者の約束をもて第一つと弁
の別れ名あをそよりもものく如おりりくれこい
ゝりりの人あ前く行ゝもこゝにあ
ゝけなもし天子殿と如ゝ人きゝの如と
下賤にて行ゝ出りしゆをそ行まを城の
張出れ行ゝひとみゝ二人出り矢ゝ
まこな後さて姫者をとこのゝく此丘尼ゝこ
人行ゝとあゝ花の若し引人てあるを

よばぐ鬱うたるこ
元禽して法師を海ら
なくなりあるの業提のあとして奇くれ
ちきをろこ法師を脇ゆ
てを加賀の國
ゆまりて西方
けるにうに奇ゆり法をうれ人也
として人あまりそれそのを
所とおひく二年光ゆ南くけるある所を
山谷うとぐうり或時八こうきり所ま
ちり大ゆ小ゆのうをひおうを万法一
母のうりをひうを人とゆあてくさ

ありし時ぞやうの筆とこひくく
ちまちまうけてとこもちまいらせ乃
ちうりハ[illegible]ちうまけりうれ
世ハ[illegible]と長発ひうんくくしくくしくハ行
しくて

きまたくそうれをのまうまうしゆき
いろうりみ[illegible]りみ道ゆ
とあそうけるを奥[illegible]
てきぬ一生を風[illegible]
あも年をさうう[illegible]
うんあわくたりんを[illegible]
一切[illegible]

うんあやうくくうりしたうこたうと
いそうをうんをうえまうまうはうつまうみる
てうるくあうこうこ風のうをもし人あ[illegible]
けうくうひうをうをうをもを美拙
をれくこもうりまりまりよくみうくくを行
世こうりをうたうこうこうりを舟をうれ拙
りうくくくくうをうをうきくくこれ
のせうりたくうを亜うを[illegible]ものこうんと行て
行うくくくを里くあうくくうれ
うをうこうを耳うくうをあうを芝ゆこうり
うくくうを安をうをうこうをうしまれもくくひうを
まにあひうを面をうを行をを面をうを行のううを

人のこゝろをもふかく賞をわらふ武ゐ
なり老ゐるを忘て遠心をこゝろとして
ゆゝしくれく業を深わるし学をもとりて
くらゐをんしもあるしく又恩あるを人のこゝろ
を行ふけるを功徳をこゝろ人生のもの

きんげ相続下絵

天和二年
辛酉五月吉祥日

万屋庄兵衛板